

- 三七、勅語講義 栗田 寛 明治二十五年九月廿七日
- 三八、修身科用教育勅語例話 今井泉定  
深井鑑一郎介 明治二十五年十月二十八日
- 三九、教育典範 日下部三之介 明治二十五年
- 四〇、必讀教育勅語述義 太田保一郎 明治二十五年
- 四一、日本倫理學案 井上圓了 明治二十六年一月七日
- 四二、勅語と佛教 加藤熊一郎 明治二十六年一月二十三日
- 四三、勅語修身寶典 松本貢 明治二十六年四月二十二日
- 四四、國民必讀勅語歷史談 高橋鋤郎 明治二十六年五月二十五日
- 四五、勅語正教解 石川喜三郎 明治二十六年七月十六日
- 四六、臣民修身軌範 渡邊嘉重 明治二十六年七月廿九日
- 四七、勅諭奉體 興風學館編 明治二十六年九月
- 四八、勅語衍義考證 三石寅吉 明治二十六年十二月二十八日
- 四九、勅語例話 松園忠雄 明治二十六年七月廿九日
- 五〇、教育勅語通俗解 宮崎孫右衛門 明治二十七年九月二十八日
- 五一、聖諭略解 帝國教育會 明治二十七年

## 三七、勅語講義

栗田 寛

明治二十五年九月廿七日

## 三八、科用教育勅語例話

今井泉定  
深井鑑一郎介

明治二十五年十月二十八日

## 三九、教育典範

日下部三之介

明治二十五年

## 四〇、必讀教育勅語述義

太田保一郎

明治二十五年

## 四一、日本倫理學案

井上圓了

明治二十六年一月七日

## 四二、勅語と佛教

加藤熊一郎

明治二十六年一月二十三日

## 四三、勅語修身寶典

松本貢

明治二十六年四月二十二日

## 四四、國民必讀勅語歷史談

高橋鋤郎

明治二十六年五月二十五日

## 四五、勅語正教解

石川喜三郎

明治二十六年七月十六日

## 四六、臣民修身軌範

渡邊嘉重

明治二十六年七月廿九日

## 四七、勅諭奉體

興風學館編

明治二十六年九月

## 四八、勅語衍義考證

三石寅吉

明治二十六年七月廿九日

## 四九、勅語例話

明治二十六年九月

明治二十六年七月廿九日

## 五〇、教育勅語通俗解

明治二十七年九月二十八日

明治二十七年九月二十八日

## 五一、聖諭略解

帝國教育會

明治二十七年

- 五二、勅語と佛教 太田教尊 明治二十七年
- 五三、國民教育之要旨 田中知邦 明治二十八年八月二十三日
- 五四、教育勅語訓言類聚 本間與吉 明治二十八年
- 五五、勅語演說筆記 新莊珂義通世 明治二十八年
- 五六、修身教育勅語講義 岡本監輔 明治二十八年
- 五七、教育勅語講義 栗田寛 明治二十八年
- 五八、聖勅奉讀私記 樋口眞彦 明治二十八年
- 五九、教育勅語訓義 上下二卷 内藤恥叟 明治二十九年十月十五日
- 六〇、教育勅語講談 南摩綱紀 明治二十九年
- 六一、大日本教 柴田峽治 明治二十九年
- 六二、勅語經訓 山方泰治 明治三十年
- 六三、教育勅語義解 明治三十一年
- 六四、教育勅語義解 明治三十一年十二月二十日
- 六五、教育勅諭述義 末松謙證著 明治三十二年三月二十二日
- 六六、教育勅語通證 大久保芳治 明治三十二年四月二十三日

- 六七、改教育聖諭教本 湯原元一 明治三十二年十月二日
- 六八、育聖 聖諭衍義 阪本栗夫 明治三十二年十二月二十七日
- 六九、讀書纂要 教育勅語義解 岡本監輔 明治三十二年
- 七〇、讀書纂要 教育勅語正解 松坂主税 明治三十二年
- 七一、教育勅語義解 論談 稲葉包通 明治三十三年五月八日
- 七二、教育勅語義解 論談 稲葉包通 明治三十三年六月十八日
- 七三、勅語俗訓 教育勅語義解 藤恥叟 明治三十三年六月十五日
- 七四、勅諭修身書 教育勅語義解 藤恥叟 明治三十三年十一月二十八日
- 七五、國民教育之方針 教育勅語義解 雲照 明治三十三年十二月二十五日
- 七六、育聖 聖諭例歌 教育勅語義解 雲照 明治三十三年十一月一日
- 七七、勅語唱歌 教育勅語義解 雲照 明治三十三年十二月十五日
- 七八、聖諭例歌 教育勅語義解 雲照 明治三十三年十月五日
- 七九、ちよくごとくほん 教育勅語義解 武島又治郎著 明治三十三年十一月二十五日
- 八〇、勅語略解 武島又治郎著 明治三十三年十二月十五日
- 八一、教育 修身要義 教育勅語義解 和田 豊 明治三十三年十一月二十五日

教育時論五  
五七號所載

- 八二、教育 修身唱歌 勅語修身唱歌 小津篠中 湯本武比古 湯原元一
- 八三、教育勅語の淵源 谷山靜藏 林田源一郎作曲
- 八四、教育倫理の基 釋雲照 明治三十四年六月
- 八五、勅語解釋 笹倉新治 明治三十四年十二月二十八日
- 八六、訂正 增補聖諭略解 帝國教育會 明治三十四年五月廿三日
- 八七、中等教育 聖諭之榮 湯本武比古 明治三十五年五月廿三日
- 八八、國民道德の涵養 湯本武比古 明治三十五年九月四日
- 八九、勅身講義 谷山靜藏 明治三十五年十一月十五日
- 九〇、修身講義 帝國教育會 明治三十五年
- 九一、教育勅語略解(女子用) 金港堂編 明治三十五年
- 九二、教育勅語解 井上圓了 明治三十五年
- 九三、勅教玄義 田中智學 明治三十六年
- 九四、教育勅語略解 川島庄一 明治三十五年
- 九五、勅語要解新教科書 廣島秀次郎 明治三十五年
- 九六、聖諭 實踐倫理 金港堂編 明治三十六年
- 九七、聖諭 實踐倫理 井上圓了 明治三十八年二月一日
- 九八、教育勅語略解 田中智學 明治三十八年七月廿二日
- 九九、教育勅語解 小津篠中 明治四十年
- 一〇〇、聖諭 實踐倫理 金港堂編 明治三十九年五月二十五日

- 九七、<sup>教育</sup>勅語讀本 東久世通禧監修 明治四十一年三月十一日
- 九八、<sup>等初</sup>勅語教本 井上哲次郎 明治四十一年四月五日
- 九九、教育勅語の御精神 樋口勘次郎 明治四十一年四月二十五日
- 一〇〇、教育勅語教科書 奥田敦信 明治四十一年五月十八日
- 一〇一、教育勅語奉釋 秦政治郎 明治四十一年九月十三日
- 一〇二、<sup>物語</sup>菊の下水 吉田靜致 明治四十一年十月二十五日
- 一〇三、女子修身教科書 <sup>勅語要義</sup> 塚吉岡郷市 明治四十一年九月二十五日
- 一〇四、撰新教育勅語讀本 寺本小治郎 明治四十一年十月二十五日
- 一〇五、<sup>教育</sup>勅語唱歌 吉田靜致 明治四十一年
- 一〇六、<sup>中等教育</sup>教育勅語正義 審文館編 明治四十一年
- 一〇七、聖諭讀本 目賀田萬世吉作曲 明治四十一年
- 一〇八、教育勅語略解 大江文城 明治四十一年
- 一〇九、<sup>少年教育</sup>懷中勅語教本 石川信助 明治四十一年
- 一一〇、教育勅語要義 林源一郎 明治四十一年
- 一一一、<sup>教育</sup>勅語教本 中村愛道 明治四十一年
- 一一二、教育勅語模範講話 植村道次郎 明治四十一年
- 一一三、<sup>漢英</sup>教育勅語譯纂 亘理章三郎 明治四十一年
- 一一四、教育勅語例解 田中良次郎 明治四十二年
- 一一五、<sup>教育</sup>教授資料 畠垣源次郎 明治四十二年
- 一一六、教育勅語衍義 道友社編 明治四十二年
- 一一七、<sup>準據</sup>小學校訓示教案 金子元臣 明治四十二年
- 一一八、<sup>戊申詔書</sup>教育勅語畫談 金子元臣 明治四十二年
- 一一九、<sup>戊申詔書</sup>教育勅語義 金子元臣 明治四十二年
- 一二〇、國民讀本參考 金子元臣 明治四十三年
- 一二一、天之聖聲 金子元臣 明治四十三年
- 一二二、教育勅語代の光 金子元臣 明治四十三年
- 一二三、<sup>準據</sup>新體婦女鑑 金子元臣 明治四十三年
- 一二四、教育勅語真髓 金子元臣 明治四十三年
- 一二五、<sup>實踐</sup>教育勅語真髓 <sup>後に教育勅語</sup> 金子元臣 明治四十三年
- 一二六、<sup>戊申詔書</sup>略解標準及略表解 金子元臣 明治四十四年七月一日

- 一二七、勅語逢原衍義 明治四十四年十二月九日
- 一二八、勅語逢原衍義 明治四十四年十二月二十四日
- 一二九、教育勅語略解及實行方案 明治四十四年十二月二十五日
- 一三〇、教育勅語  
戊申詔書適例現代兒童美談 鎌田政秀 明治四十四年
- 一三一、教育勅語畫解 樋口勘治郎 明治四十四年
- 一三二、小學校教員  
檢定受驗用勅語衍義 附詔書略解 教育研究會 明治四十四年
- 一三三、教育勅語要解 岡部讓 明治四十四年
- 一三四、聖訓綱要 中村實治 明治四十四年
- 一三五、勅語通解 瓜生寅 明治四十四年
- 一三六、教育勅語述義 遠藤隆吉 明治四十五年三月十八日
- 一三七、教育勅語要義 清水廣次 明治四十五年五月二十二日
- 一三八、教育勅語聖旨實行方法 (儒學復興論) 藤井上哲次郎 明治四十五年四月二十三日
- 一三九、詔勅と日本人の精神 藤井健治郎 明治四十五年
- 一四〇、學校家庭  
勅語と御製再版 石原萬吉著 明治四十五年
- 一四一、教育勅語と宗教 龜谷聖鑑 大正元年九月十三日
- 一四二、教育勅語讀本 大正元年十一月三日
- 一四三、心としたる明治天皇聖歌聖德 来島正時發行著
- 一四四、國民教育勅語讀本 堀尾太郎 大正元年
- 一四五、教育勅語鑽仰錄 著者未詳 大正元年
- 一四六、高等小學修身書卷二 文部省 大正元年
- 一四七、人格の模範精神修養講話 名教學會 大正元年
- 一四八、乃木大將書教育勅語正義 德廣萬 大正元年
- 一四九、教育勅語と天理教 文部省 大正元年
- 一五〇、勅語述義 日本弘道會青年部編 大正元年
- 一五一、倫理御進講筆記 勅語 道友社編 大正元年
- 一五二、教育  
教訓 教育勅語の教湯本武比古 大正元年
- 一五三、教育勅語の教訓 杉浦重剛 大正元年
- 一五四、教育勅語圖解及戊申詔書義解 前川萬次郎 大正元年
- 一五五、教育  
勅語 郷土のはまれ 森脇紫逕 大正元年
- 一五六、勅語奥義 和田清吉 大正元年
- 一五七、教育  
教訓 教育勅語の教訓 藤林橘川 大正元年
- 一五八、教育  
勅語 郷土のはまれ 中村元彦 大正元年

- 一五七、教育に關する勅語の本義  
來島正時 大正五年一月四日
- 一五八、教育勅語要解  
大内青轡 大正五年四月五日
- 一五九、教育勅語と士規七則  
村上俊江 大正五年五月一日
- 一六〇、教育勅語  
戊申詔書道話  
川尻寶岑 大正五年七月
- 一六一、明治天皇聖諭帖  
安本春湖 大正六年一月五日
- 一六二、教育勅語通解  
亘理章三郎等 大正六年五月三日
- 一六三、教育勅語  
拜讀鏡映錄  
中島維清 大正六年十二月
- 一六四、教育勅語圖解  
三浦喜雄 大正六年
- 一六五、八大詔勅と小學教育  
大日本國民教育會編  
大正六年六月二十五日
- 一六六、八大詔勅教本  
中島維清
- 一六七、十大詔勅謹解  
科外教育  
叢書の内  
野澤正浩 大正六年
- 一六八、我が國民道德  
吉田熊次 大正七年二月
- 一六九、教育勅語及戊申詔書解義  
前島義教 大正七年
- 一七〇、文檢受驗用  
教育勅語及戊申詔書釋義  
教育學術界社編  
中山勘太郎 大正七年三月二十日
- 一七一、教育勅語實踐資料  
教育學會編  
大正八年五月十日

- 一七二、教育(教育勅語御下賜)  
(三十年記念號)  
苔溪會 大正九年十月十五日
- 一七三、勅語四體帖  
豊道慶中書 大正九年十月
- 一七四、明治神宮御鎮  
座奉祝記念明治天皇偉德鴻業之根源  
一名教育に關する勅語の真體  
河端金三郎 大正九年十一月三日
- 一七五、教育勅語講義  
笛倉新治 大正九年十一月
- 一七六、勅語下賜三十年記念歌(一枚刷)  
永井幸次作曲  
大正九年
- 一七七、教育勅語衍義  
永山重樹作歌  
西村時彦 大正九年
- 一七八、三大勅語實踐資料  
渡邊霞亭 大正九年
- 一七九、教育勅語辭典  
工藤茂三郎 大正九年
- 一八〇、教育勅語と御製  
亘理章三郎 大正十年六月十五日
- 一八一、社會實理  
教育勅語新衍義  
赤田良仙 大正十一年四月
- 一八二、教育勅語美しき道  
及川智雄 大正十一年五月十日
- 一八三、教育勅語の背景と宗教  
亘理章三郎 大正十一年六月五日
- 一八四、教育勅語大意  
赤田良仙 大正十二年一月
- 一八五、尋常小學修身書卷六(兒童用)  
文部省 大正十二年三月
- 一八六、尋常小學修身書(教師用)

- 一八七、三大詔勅語謹解  
新教育研究會 大正十四年二月二十五日
- 一八八、國民須知重要詔勅奉釋  
中山勘太郎 大正十四年七月
- 一八九、教育勅語義解  
梨羽時起 大正十四年十月三日
- 一九〇、帝國臣民 第一編教育勅語私解  
大正十四年
- 一九一、勅教用字緩急解  
川合致秀 大正十四年
- 一九二、聖勅奉行讀本  
君塙庄次郎 大正十五年十二月十日
- 一九三、大聖典教育勅語 第二編教育勅語私解  
昭和新皇道 昭和二年五月二十五日
- 一九四、勅語謹講  
辻村楠造 大正二年二月十五日
- 一九五、高等小學修身書卷二（兒童用）  
佐藤範雄 昭和二年十二月
- 一九六、勅語謹解  
君塙庄次郎 昭和二年
- 一九七、教の基礎  
三井信 大正十五年十二月十日
- 一九八、聖訓謹話  
大正十四年
- 一九九、聖訓謹解  
内田良平 昭和二年五月二十五日
- 二〇〇、文檢 第一編教育勅語私解  
金光教本部著 昭和二年
- 二〇一、聖諭畫鑑  
大阪難波小學校編 昭和三年九月
- 二〇二、國體大和魂  
佐藤範雄 昭和二年二月十五日
- 二〇三、皇國の華抄  
岩部撓 昭和二年
- 二〇四、聖諭畫鑑  
内田良平 昭和二年五月二十五日
- 二〇五、教育勅語解釋參考  
馬場峯月 昭和四年十一月三十日
- 二〇六、教育生活四十箇年皇道體現の教育  
山口袈裟治 昭和五年六月十日
- 二〇七、聖訓  
山本良吉 昭和五年六月二十日
- 二〇八、勅語四十年  
報國至誠會 昭和五年六月三日
- 二〇九、四大詔勅語釋義  
昭和五年五月五日
- 二一〇、教育勅語謹解  
昭和五年九月五日
- 二一一、思想的嵐を突破して  
今井秀一 昭和五年九月六日
- 二一二、かりよい教育勅語謹話  
里見岸雄 昭和五年九月六日
- 二二三、小供にわ教育勅語謹話  
吉田靜致 昭和五年九月六日
- 二二四、詔勅ものがたり  
滋谷義夫 昭和五年九月十五日
- 二二五、教育勅語謹解  
増子懷永 昭和五年九月十日
- 二二六、教育勅語物語  
中村孝也 昭和五年九月二十日
- 二二七、教育修身教育勅語の新解釋  
國民精神作興會 昭和五年九月二十五日

- 二二七、教育勅語の時代思想的解釋と新説話 岡本瓊二 昭和五年九月二十五日
- 二二八、教育勅語の御下賜と其四十周年記念 亘理章三郎 昭和五年十月一日
- 二二九、少年教育勅語物語 吉田熊次 昭和五年十月三十日
- 二二〇、教育勅語四十一年 加納信夫 昭和五年十月一日
- 二二一、教育勅語釋義 栃木縣女子師範學校桂會 昭和五年十月十日
- 二二二、教育勅語謹話 大吉杉謹一致 昭和五年十月十五日
- 二二三、教育勅語と聖帝の左右 新田興 昭和五年十月十五日
- 二二四、教育勅語の精神 吉田熊次 昭和五年十月十五日
- 二二五、明治天皇と教育勅語 亘理章三郎 昭和五年十月二十日
- 二二六、教育勅語と學校教育 金子堅太郎 昭和五年十月二十四日
- 二二七、教育に關する勅語御下賜四十周年記念講演 大島文理科大學 昭和五年十月十五日
- 二二八、教育に關する勅語漢發四十周年記念講演 東京文理科大學 昭和五年十月十五日
- 二二九、教育に關する勅語御下賜四十周年記念展覽會目錄 金子堅太郎 昭和五年十月
- 二三〇、教育勅語換發四十週年記念 教育勅語關係書目 廣島文理科大學 昭和五年十月
- 二三一、明治天皇勅教ものがたり 田中智學 昭和五年十月二十五日
- 二三二、勅語と國家及社會 遠藤隆吉 昭和五年十月二十五日
- 二三三、教育勅語謹話 修養叢書刊行會謹輯 昭和五年十月三日
- 二三四、教育勅語の御精神を拜察し奉りて 田中隆三 昭和五年十月
- 二三五、聖諭繪かゞみ 少女俱樂部 昭和五年十月
- 二三六、祖先の遺風 郷土文庫 第十編 鹿児島尋常高等小學校 昭和五年十月三十日
- 二三七、日曜報知 臨時增刊教育勅語 漢發四十週年記念 中村孝也 昭和五年十月三十日
- 二三八、聖諭かゞみ 日曜報知所載 山内佐太郎 昭和五年十月三十日
- 二三九、教育勅語漢發四十週年記念 天壤無窮生活 仁保龜松 昭和五年十一月
- 二四〇、教育勅語漢發四十周年記念 倫理書同盟目錄 茂田萬一郎 昭和五年十一月十一日
- 二四一、建國明治大正昭和勅語詔書精義 大阪府督學課 昭和五年十二月二十八日
- 二四二、教育勅語漢發當時を顧みて 仁保龜松 昭和六年一月一日
- 二四三、國民道徳の基範 教育勅語奉體に關する管見 高森良人 講演 昭和六年三月一日
- 二四四、教育勅語漢發四十周年記念講演集 兵庫縣明石女子師範學校 昭和六年三月二十日
- 二四五、教育勅語漢發四十周年記念 文部省編 昭和六年三月二十五日
- 二四六、教育に關する勅語漢發四十周年記念 記念講演會式辭祝辭講演集 德富猪一郎 講演 昭和六年三月二十日
- 教育勅語關係書目

- 二四七、教育勅語字源考釋  
葛城理平  
昭和六年七月十六日
- 二四八、教育勅語と教育の淵源  
三村親信  
昭和六年七月二十五日
- 二四九、教育勅語の聖旨に應へ奉りて  
和田九平
- 二五〇、教育勅語繪本<sup>五</sup>

### 勅語御下賜四十年記念に際し諸雑誌に掲げたる題目と其の記述者

- 一、聖勅回顧四十年  
足立栗園 弘道 四六一號  
五年二〇月號
- 二、勅語の御趣旨を徹底せしめし實際施設  
淺井榮次郎 教育研究 三六三號  
五年一〇月號
- 三、教育勅語下賜四十周年に當つて  
淺賀辰次郎 藝備教育 三〇九號  
五年一〇月號
- 四、勿體なき一徳の御言葉  
栗野幸太郎 岐阜縣教育 三四四號  
五年一〇月號
- 五、教育勅語御済發當時の思出  
荒川五郎 教育時論 一六三三號  
五年一〇月號
- 六、教育勅語済發四十年記念に當りて  
安藤秋三郎 興民 一二二號  
五年一〇月號
- 七、教育勅語の聖旨徹底上教育者に望む  
安藤兼次郎 宮崎縣教育 三三八號  
五年一〇月號
- 八、澁谷義夫氏の教育勅語觀  
I M 生 教育公論 一〇月號  
五年一〇月號

### 九、心の記念碑

- 一〇、教育勅語済發の四十年前を回顧して  
井手蕉雨 弘道 四六一號  
五年二〇月號
- 一一、教育勅語御下賜四十年記念に當りて  
井手力之助 京都教育 四九一號  
五年一〇月號
- 一二、勅語済發滿四十年の感想  
伊藤千眞三 日本書院 九卷一號  
五年一一月號
- 一三、教育勅語済發當時の追憶と國體研究の主張  
伊藤藤太郎 文教の朝鮮 六二二號  
五年一〇月號
- 一四、教育勅語と國民道德  
井上盛太 新上野 五一一號  
五年一〇月號
- 一五、教育勅語済發當時を追憶し併せて所感を述べ  
井上哲次郎 弘道 四六一號  
五年一〇月號
- 一六、「教育に關する勅語」中の語句の解釋に就て  
池岡直孝 教育研究 五六三號  
五年一〇月號
- 一七、感 激  
同 國學院雜誌 五六一號  
五年一〇月號
- 一八、教育勅語記念日感想  
石原定孝 教育時報 五二一號  
五年一〇月號
- 一九、教育勅語の御精神を行せよ  
板井賛次郎 岩手教育 五八卷一號  
五年一一月號
- 二〇、教育勅語済發の四十年前を回顧して  
一戸兵衛 宮崎縣教育 五三一號  
五年一二月號
- 二一、教育勅語済發の四十年前を回顧して  
今井秀一 京都教育 五八卷一號  
五年一二月號
- 二二、教育勅語の下るまで  
岩井榮之助 帝國教育 五四九號  
五年一〇月號
- 二三、時代意識と教育勅語  
石井研堂 京都教育 五七八號  
五年一〇月號
- 岩川超三 教育公論 五九一號  
五年一〇月號

- 二四、教育勅語と修身教育 岩瀬六郎 學修研究 九卷一號 五年一〇月
- 二五、聖勅奉戴の回顧 岩村俊郎 岐阜縣教育 四三四號 五年一〇月
- 二六、教育勅語御渙發當時の思出 入交堯次郎 教育時論 五六三號 五年一〇月
- 二七、教育勅語御渙發四十周年に際して 五年一〇月
- 二八、教育勅語渙發満四十周年に際して 五年一〇月
- 二九、勅語の御趣旨を徹底せしめし實際施設 五年一〇月
- 三〇、教育勅語の渙發（本邦德育の沿革） 五年一〇月
- 三一、教育勅語渙發四十年に際して 五年一〇月
- 三二、教育勅語御下賜四十周年を迎へ奉りて 五年一〇月
- 三三、勅語の御趣旨を奉體せる典型的例話 五年一〇月
- 三四、教育勅語と憂ふべき現代世相 五年一〇月
- 三五、教育勅語發布當時を回想して 五年一〇月
- 三六、教育勅語と時代思想 五年一〇月
- 三七、教育勅語發布當時の思ひ出 五年一〇月
- 三八、修身科の本質と教育勅語の御趣旨 五年一〇月
- 三九、明治神宮の廣大前に願文を奉りて
- 四〇、如何にして教育勅語の趣旨を普及徹底すべきか 太田彥四 學友會雜誌 六一號六年二月仙臺一中
- 四一、教育勅語四十年の記念に際し教育時論に關する思出 太田秀穂 山梨教育 五年一〇月
- 四二、教育勅語御下賜四十年の記念 大東重善 教育時論 五六三三號
- 四三、國史に於ける教育勅語の渙發 大松庄太郎 帝國教育 五年一〇月
- 四四、教育勅語渙發四十周年を迎へて 岡本得一 文教の朝鮮 五年一〇月
- 四五、教育勅語渙發四十周年に際して感じのまゝ 大山一夫 紀伊教育 五年一〇月
- 四六、聖教渙發四十周年を迎へて 奥村幸衛 教育時報 五年一〇月
- 四七、渙發の意義 溫知學人 京都教育 五年一〇月
- 四八、渙發か煥發か 賀須井千 兵庫教育 五年一〇月
- 四九、教育勅語下賜四十週年記念に就き所感を述ぶ 加藤玄智 國學院雜誌 五年一〇月
- 五〇、教育勅語渙發満四十年に際して 弘道 教育研究 五年一〇月
- 五一、教育勅語を神の御言葉と評したセジユウツク氏 同 五年一〇月
- 五二、教育勅語と時代思想 加藤昭堂 精神 五年一〇月
- 五三、教育勅語の現代的考察 五年一〇月

勅語御下賜四十年記念に際して諸雑誌に掲げたる題目と其の記述者

教育勅語釋義全書

- 五四、萬邦無比の國體  
 五五、教育勅語の根柢  
 五六、教育勅語済發四十周年に際して  
 五七、小さい馬子（勅語に因む童話）  
 五八、教育御下賜四十年記念講演  
 五九、勅語の御趣旨を徹底せしめし實際施設  
 六〇、教育勅語發布當時の思ひ出  
 六一、教育勅語済發四十年に際して  
 六二、教育勅語済發の四十年前を偲びて教育家諸氏に希望す  
 六三、教育勅語済發満四十年に際して  
 六四、小學校に於ける舉式に就て  
 六五、勅語済發四十周年に際して  
 六六、教育勅語と元田東野先生  
 六七、教育勅語済發の四十年を回顧して  
 六八、平常心これ道

- 六九、感想  
 七〇、教育勅語御済發當時を憶ふ  
 七一、教育勅語済發満四十年に際して  
 七二、教育勅語と國史の回顧  
 七三、教育勅語済發四十年の記念日に際して  
 七四、教育勅語發布記念所感  
 七五、勅語述義（抄）  
 七六、教育勅語教授規定  
 七七、奉安所は國民至誠の結晶  
 七八、職業指導を重視する教育勅語の德目取扱法  
 七九、我が校奉安殿建設に就て  
 八〇、教育に勅語御下賜四十年記念に臨みて  
 八一、教育勅語と現代生活思潮  
 八二、教育勅語と現代生活思潮  
 八三、教育勅語と現代生活思潮

勅語御下賜四十年記念に際して諸雑誌に掲げたる題目と其の記述者

河合義文	島根教育	四年二月
木場貞長	教育時論	五年一月
紀平正美	國學院雜誌	五六卷一〇月號
北野史情	宮崎縣教育	五年一月
金田一國士	岩手教育	八年一月
熊谷直秀	秋田教育	五年二月
栗田寛	茨城教育	三年八月
河合栄吉	新上野	五年一月
川面松衛	京都教育	四年一月
川村五峰	新上野	五年一月
川淵治馬	新上野	五年一月
川端安藏	新上野	五年一月
河野省三	宮崎縣教育	三年八月
河野貞敏	日本及日本人	二月
川田雪山	日本及日本人	二月
川田正徵	帝國教育	五年一月
兼子鎮雄	教育研究	五六三號
金子堅太郎	教育研究	五年一月
樺葉勇	教育研究	五年一月
嘉納治五郎	島根教育	五年二月
甲斐莊正顯	茨城教育	五年一月
香取久吉	岩手教育	八年一月

河合栄吉	まつばら	五月
川面松衛	新上野	五月
川村五峰	新上野	五月
川淵治馬	新上野	五月
川端安藏	新上野	五月
河野省三	宮崎縣教育	三年八月
河野貞敏	日本及日本人	二月
川田雪山	日本及日本人	二月
川田正徵	帝國教育	五年一月
兼子鎮雄	教育研究	五六三號
金子堅太郎	教育研究	五年一月
樺葉勇	教育研究	五年一月
嘉納治五郎	島根教育	五年二月
甲斐莊正顯	茨城教育	五年一月
香取久吉	岩手教育	八年一月

五九〇

教育勅語釋義全書

五九二

八四、漢譯教育勅語の奉繹

拳々道人

秋田教育

七年二月號

八五、教育勅語の御英斷を憶ふ

小井戸方三郎

新上野

五年一〇月號

八六、秋田に歸りて若い頃を語る

教育勅語  
を繞りて

小泉古處軒

秋田教育

七年二月號

八七、教育勅語渙發四十周年記念

小平高明

學友會雜誌

六年一號六中二月仙臺一〇月號

八八、教育に關する勅語渙發四十周年に際して

近藤兵庫

岐阜縣教育

四年三四號

八九、四十年前の思出

兒玉秀雄

パンフレット

五年一〇月年

九〇、「教育に關する勅語」中の語句の解釋に就て

佐々木忠藏

教育研究

五年一月號

九一、孝女野田鶴子 教育勅語渙發滿四十年記念

佐々木秀一

パンフレット

五年一〇月年

九二、古今中外に通ずる大道

近藤蔓雄

北海道教育

五年二月號

九三、同

佐藤昌介

岩手教育

五年二月號

九四、教育勅語渙發滿四十年を畏みて

佐藤大麟

藝術教育

五年一〇月號

九五、御聖旨と現代思想

齋藤斐章

教育時論

五年一〇月號

九六、教育勅語御渙發四十年記念に際し所信を陳ぶ

佐藤鹿三郎

教育（會溪）

五年一〇月號

九七、教育勅語御渙發當時の思出

岩手教育

教育研究

五年一月號

九八、教育に關する勅語

同

教育研究

五年一月號

九九、教育に關する勅語渙發滿四十周年に際して

齋藤實

パンフレット

一年一〇月年

一〇〇、教育勅語と思想の時代性

里見岸雄

教育研究

五年一〇月號

一〇一、勅語四十年（卷頭言）

山東善之進

教育研究

五年一〇月號

一〇二、「大御心」について

清水暁昇

教育研究

五年一〇月號

一〇三、大勅語をかしこみて

志良以環

教育研究

五年一〇月號

一〇四、勅教の大義と聖書の教理

柴垣則義

教育研究

五年一〇月號

一〇五、教育勅語渙發四十周年に際し所懷を述ぶ

越佐教育

教育研究

五年一〇月號

一〇六、教育勅語と修身教授法

滋谷義夫

教育研究

五年一〇月號

一〇七、教育勅語と我國民的精神

島本愛之助

教育研究

五年一〇月號

一〇八、四十年の回顧

清水暁昇

教育研究

五年一〇月號

一〇九、勅語の御趣旨を奉體せる典型的例話

下田次郎

教育研究

五年一〇月號

一二〇、教育勅語渙發の四十年前を回顧して

下田次郎

教育研究

五年一〇月號

一二一、教育勅語御渙發當時の思出

尺秀三郎

教育研究

五年一〇月號

一二二、教育に關する勅語の捧讀に關する作法

角谷源之助

教育研究

五年一〇月號

一二三、教育勅語渙發の四十年前を回顧して

附屬小學修身研究部

教育研究

五年一〇月號

- 勅語御下賜四十年記念に際して諸雑誌に掲げたる題目と其の記述者
- 一〇九、教育に關する勅語渙發滿四十周年に際して 小井戸方三郎
  - 一〇一、勅語四十年（卷頭言） 新上野
  - 一〇二、「大御心」について 小平高明
  - 一〇三、大勅語をかしこみて 近藤蔓雄
  - 一〇四、勅教の大義と聖書の教理 児玉秀雄
  - 一〇五、教育勅語渙發四十周年に際し所懷を述ぶ 小泉古處軒
  - 一〇六、教育勅語と修身教授法 佐々木忠藏
  - 一〇七、教育勅語と我國民的精神 佐々木秀一
  - 一〇八、四十年の回顧 齋藤實
  - 一二〇、教育勅語渙發の四十年前を回顧して 佐藤昌介
  - 一二一、教育勅語御渙發當時の思出 佐藤大麟
  - 一二二、教育に關する勅語の捧讀に關する作法 齋藤斐章
  - 一二三、教育勅語渙發の四十年前を回顧して 同

- 一一四、教育勅語を捧讀して 濱尾武次郎 兵庫教育 四九二号  
 一二五、大御心 瀬谷眞吉郎 岩手教育 五年一〇月號  
 一二六、教育勅語下賜記念の方法に就て 清野辰藏 京都教育 五年一一月號  
 一二七、孝子富樺永昌直右衛門事蹟 田中貢太郎 岐阜縣教育 三三八五年  
 一二八、教育勅語下賜四十周年に當りて 田中隆三 教育勅語済發四十周年記念發行一五〇年  
 一二九、教育勅語の實際的取扱と自己體現への修身教育 同  
 一二〇、教育勅語四十周年記念に際して 田中貢太郎 宮崎縣教育 五年一〇月  
 一二一、勅語の御精神を明徴にし御趣旨の服膺が急務 京都教育 五年一〇月  
 一二二、勅語済發四十周年記念に際して 田中貢太郎 岐阜縣教育 五年一〇月  
 一二三、勅語済發四十周年記念に際して 田中貢太郎 京都教育 五年一〇月  
 一二四、道と教 同  
 一二五、毎家に一本を藏せしめよ 田畠武一 新上野 五年一〇月  
 一二六、勅語の御趣旨を徹底せしめし實際施設 高瀬武次郎 弘道 五年一〇月  
 一二七、教育勅語済發滿四十年に際して 竹井與三郎 教育研究 五六三號  
 一二八、教育勅語済發頃の回想 谷本富 同  
 一二九、教育勅語と時代思想 同  
 一三〇、フレンツエル博士と教育勅語 同  
 一三一、勅語の御趣旨を徹底せしめし實際施設 津田榮 教育研究 五年一〇月號  
 一三二、教育勅語済發の四十年前を回顧して 椿惣一 文教の朝鮮 五年一二月號  
 一三三、教育勅語に關聯して思想問題の根柢を論ず 坪井仙次郎 教育研究 五六三號  
 一三四、芳川顯正伯を憶ふ 鶴藤幾太郎 學習研究 五年一〇月號  
 一三五、教育勅語と現代思潮 刀水 京都教育 五年一〇月號  
 一三六、教育に關する勅語済發四十年 德江偏藏 國學院雜誌 五六卷一〇月號  
 一三七、教育勅語と現代教育 德川達孝 教育公論 五年一〇月號  
 一三八、國民道德上より見たる教育勅語 友納養德 新上野 五年一〇月號  
 一三九、聖勅済發四十周年を迎へて 中曾根滿壽雄 教育時論 五年一〇月號  
 一四〇、教育勅語を拜讀して 中村孝也 紀伊教育 五年一〇月號  
 一四一、教育勅語済發四十周年記念に當りて 中村止戈男 教育研究 五年一〇月號  
 一四二、勅語の御趣旨を徹底せしめし實際施設 中山勘太郎 教育研究 五年一〇月號  
 一四三、教育勅語済發の由來並に皇紀について 中山久四郎 教育研究 五年一〇月號

一四四、教育勅語謹解	西川光二郎	子供の道話	五六卷一〇〇號
一四五、教育勅語渙發の四十年前を回顧して	西原光太郎	京都教育	四年九月
一四六、國家と教育	西本三十二	學習研究	五年一〇月
一四七、國體の精華と教育の淵源	根岸忠男	新上野	五年一一月
一四八、教育勅語渙發後四十年に會せる所感	根本良顯	茨城教育	五年一二月
一四九、教育勅語御渙發當時の思出	野口援太郎	教育時論	五年一〇月
一五〇、教育に関する勅語と修身教育	野田義夫	學習研究	五年一一月
一五一、教育勅語中の語句の解釋に就て	同	教育研究	五六三號
一五二、明治天皇御製と教育勅語	同	教育時論	五年一〇月
一五三、教育勅語と故森文部大臣	同	教育時論	五年一〇月
一五四、教育勅語渙發四十周年感懷	野平正男	藝術教育	三年〇九號
一五五、教育勅語下賜四十年	野々村金五郎	教育時論	五年一〇月
一五六、教育に関する勅語下賜四十周年に際して	長谷川乙彥	藝術教育	五年一〇月
一五七、教育勅語と王道	畠市太郎	教育時論	五年一〇月
一五八、教育勅語渙發四十周年を迎へての感	服部宇之吉	藝術教育	五年一〇月
一五九、教育勅語渙發四十年に際して	花岡慶治郎	教育時論	五年一〇月
一六〇、教育勅語拜戴懷舊	新上野	藝術教育	五年一〇月
一六一、教育勅語に關する四十年間の追憶	同	藝術教育	五年一〇月
一六二、教育勅語渙發四十周年に際して國民に望む	羽場英太郎	國學院雜誌	五六卷一月
一六三、教育勅語と新教育	林民造	教育時論	五年一〇月
一六四、教育勅語とその後の日本教育概況	林胤吉	藝術教育	五年一〇月
一六五、教育勅語渙發四十年記念日	林博太郎	藝術教育	五年一〇月
一六六、教育勅語渙發四十周年を迎へて所感を述ぶ	原田實	國學院雜誌	五六卷一月
一六七、教育勅語と我國民の猛省	阪正臣	教育時論	五年一〇月
一六八、教育勅語渙發四十年前を回顧して	平山正	藝術教育	五年一〇月
一六九、教育に關する勅語に就て	坂萬次郎	藝術教育	五年一〇月
一七〇、教育勅語と明治思想史	廣瀬爲四郎	藝術教育	五年一〇月
一七一、肇國宏遠と樹德深厚	深作安文	藝術教育	五年一〇月
一七二、教育勅語渙發四十年に際して	廣江万次郎	藝術教育	五年一〇月
一七三、教育勅語渙發四十年に際して	國學院雜誌	藝術教育	五年一〇月

勅語御下賜四十年記念に際して諸雑誌に掲げたる題目と其の記述者

一七四、教育勅語と時代思想

一七五、教育勅語済後四十年を迎へて

一七六、勅語の御趣旨を徹底せしめし實際施設

一七七、勅語済四十周年を迎へて

一七八、教育勅語済當時の思想界を想ふ

一七九、教育勅語済四十年記念事業について

一八〇、教育勅語済満四十年に際して

一八一、聖旨

一八二、として反省の言葉

一八三、教育勅語の新例話

一八四、教育勅語済四十周年に際して

一八五、教育勅語と國民道德

一八六、教育に関する勅語の済發

一八七、教育に関する勅語と李退溪

一八八、教育勅語の奉行に就て

一八九、教育勅語済四十周年記念に際して

一九〇、特別記念號發刊に當りて

一九一、教育勅語御下賜満四十年を迎へて（歌）

一九二、教育勅語と民族精神

一九三、感想

一九四、勅語の御趣旨を徹底せしめし實際施設

一九五、教育勅語謄本の表裝様式

一九六、教育勅語謄本表裝様式に就て

一九七、英國の教育勅語

一九八、國體上より見た忠孝の意義の異同に就て

一九九、聖旨徹底上注意すべき事項

二〇〇、回想錄

二〇一、勅語の御趣旨を徹底せしめし實際施設

二〇二、教育勅語の済發せられたころ

二〇三、教育勅語の御精神に就て

勅語御下賜四十年記念に際して諸雑誌に掲げたる題目と其の記述者

松月秀雄	文教の朝鮮	五年二月號	教育研究	五年一月號
松永昇	岐阜縣教育	四年三四號	吾校	五年一月號
松原幸彥	岐阜縣教育	四年三四號	學習研究	五年一月號
松本榮太郎	岐阜縣教育	四年三四號	帝國教育	五年一月號
三木老生	岐阜縣教育	五年一月號	文教の朝鮮	五年一月號
三崎文四郎	岐阜縣教育	五年一月號	弘道	五年一月號
同谷保	岐阜縣教育	五年一月號	五年一月號	五年一月號
水戸部寅松	岐阜縣教育	五年一月號	五年一月號	五年一月號
水野平次	岐阜縣教育	五年一月號	臨時增刊	五年一月號
宮脇半助	岐阜縣教育	五年一月號	五年一月號	五年一月號
村上定吉	岐阜縣教育	五年一月號	五年一月號	五年一月號
森丑太郎	岐阜縣教育	五年一月號	五年一月號	五年一月號
森星嵐	岐阜縣教育	五年一月號	五年一月號	五年一月號
森常藏	岐阜縣教育	五年一月號	五年一月號	五年一月號
教育研究	岐阜縣教育	五年一月號	五年一月號	五年一月號
五年一月號	五年一月號	五年一月號	五年一月號	五年一月號

二〇四、教育勅語の漢譯に就て

二〇五、不變者

二〇六、教育勅語渙發四十周年を迎へて

二〇七、教育勅語御發布第四十週年を迎へて

二〇八、教育に關する勅語渙發第四十周年を回顧して

二〇九、背後之力(勅語御下賜四十年記念感想)

二一〇、我が校に於ける教育勅語に關する施設の一端

二一一、教育勅語御下賜四十年所感(文苑漢文)

二一二、教育勅語御渙發四十週年記念回顧

二二三、教育勅語渙發四十年

二一四、教育に關する勅語中の語句の解釋に就て

二一五、教育に關する勅語中の語句の解釋に就て

二一六、教育勅語と日本弘道會

二一七、教育勅語と輓近學術の進歩

二一八、教育に關する勅語中の語句の解釋に就て

梁田忠山 秋田教育

山口泰平 島根教育

山崎恭次郎 保護者會報

山崎眞之 報德

山田京松 五年七月  
佐賀縣藤津郡鹿島町尋高 五年二月  
小校保護者會報一輯

山田永俊 四三四號  
五年一〇月  
岐阜縣教育 五年一〇月  
五年一〇月

山内佐太郎 新上野 五年一〇月  
五年一〇月  
岐阜縣教育 五年一〇月  
五年一〇月

山村敏行 山本良吉 愛知教育

湯原元一 教育研究

吉田熊次 兵庫教育

吉田靜致 教育研究

吉田信重 教育研究

和田喜八郎 教育研究

若原彥造 教育研究

和田九平 教育研究

亘理章三郎 教育研究

吉田義則 北海道教育

吉田信重 新上野 五年一二月  
五年一〇月

吉田靜致 新上野 五年一二月  
五年一〇月

吉田信重 新上野 五年一二月  
五年一〇月

勅語御下賜四十年記念に際して諸雑誌に掲げたる題目と其の記述者

二三四、教育勅語済發四十年を迎ふ（時論）	割田知巳庵	弘道	五六一月號
二三五、咸有一德	島根教育	五四二月號	五年一〇月號
二三六、教育勅語と將來の教育	學習研究	九卷一月號	五年一〇月號
二三七、教育勅語四十周年を迎へて	北海道教育	五年一二月號	五年一二月號
二三八、	島根教育	五年一〇月號	五年一〇月號
二三九、教育勅語済發四十年に際して	新上野	五一卷一〇月號	五年一〇月號
二四〇、教育勅語済發四十周年にあたりて	富山教育	五年一二月號	五年一二月號
二四一、教育勅語済發四十週年を迎ふ	兵庫教育	五年一〇月號	五年一〇月號
二四二、聖勅四十周年を迎へて	埼玉教育	五年二六八號	五年一〇月號
二四三、教育勅語済發四十年を迎へて	秋田教育	五年一〇月號	五年一〇月號
二四四、教育勅語済發までの社會事情	京都教育	五年一〇月號	五年一〇月號
二四五、教育勅語済發事情	同	同	同
二四六、教育勅語済發當時の秋田縣事情	張子	同	同
二四七、教育勅語済發四十年服膺の效果と記念事情	編輯	同	同
二四八、拳々服膺せよ社會の耳目たるものゝ反省	同	同	同
二四五、教育勅語済發當時を語る座談會	同	同	同
二五三、勅語済發當時の回想（錦織竹香） <small>外一二名</small>	日本及日本人	五年一一月號	五年一一月號
二五四、教育勅語済發四十周年記念 感銘錄	島根教育	五年一二月號	五年一二月號
二五五、教育勅語済發四十周年記念式に於ける平井知事の式辭	文教の朝鮮	六年二〇月號	五年一二月號
二五六、同式場に於ける栗屋前文部次官の祝詞	福岡縣中學傳習館	五年一二月號	五年一二月號
二五七、	同	同	同
二五八、勅語御下付に附き文部大臣の訓示	岐阜縣教育	四年一〇月號	五年一〇月號
二五九、教育勅語済發四十年に際し教化事業振興策所感（諸家）	山口縣教育	五年一〇月號	五年一〇月號
二六〇、教育勅語済發の由來	茨城教育	五年一〇月號	五年一〇月號
二六一、教育勅語済發四十周年記念所感文集	國學院雜誌	五年一一月號	五年一一月號
二六二、聖旨徹底に對する各學校の回答	弘道	四年一〇月號	五年一〇月號
二六三、聖旨徹底に關して本誌に寄せられたる名士の高見	宮崎縣教育	五年一〇月號	五年一〇月號
勅語御賜四十年記念に際して諸雑誌に掲げたる題目と其の記述者	栃木縣立宇都宮中學校々友會	五年一二月號	五年一二月號
六〇三、	同	同	同

二六四、教育勅語御下賜四十周年記念特別號

二六五、教育に關する勅語御下賜滿四十年

あかつき  
一五〇月年  
精進  
五年一二〇月號  
附奈良小女校師

教育勅語釋義全書 終

附  
錄

漢譯

朕惟我皇祖皇宗肇國宏遠樹德深厚我臣民克忠克孝億兆一心世濟其美此我國體之精華而教育之淵源亦實存乎此爾臣民孝于父母友于兄弟夫婦相和朋友相信恭儉持己博愛及衆修學習業以啓發智能成就德器進廣公益開世務常重國憲遵國法一旦緩急則義勇奉公以扶翼天壤無窮之皇運如是者不獨爲朕忠良臣民又

足以顯彰爾祖先之遺風矣

斯道也實我皇祖皇宗之遺訓而子孫臣民之所當遵守通諸古今而不謬施諸中外而不悖朕庶幾與爾臣民俱拳拳服膺咸一其德

明治二十三年十月三十日

御名御璽

## ENGLISH TRANSLATION.

---

Know ye, Our subjects:

Our Imperial Ancestors have founded Our Empire on a basis broad and everlasting and have deeply and firmly implanted virtue; Our subjects ever united in loyalty and filial piety have from generation to generation illustrated the beauty thereof. This is the glory of the fundamental character of Our Empire, and herein also lies the source of Our education. Ye, Our subjects, be filial to your parents, affectionate to your brothers and sisters; as husbands and wives be harmonious, as friends true; bear yourselves in modesty and moderation; extend your benevolence to all; pursue learning and cultivate arts, and thereby develop intellectual faculties and perfect moral powers; furthermore advance public good and promote common interests;

always respect the Constitution and observe the laws; should emergency arise, offer yourselves courageously to the State; and thus guard and maintain the prosperity of Our Imperial Throne coeval with heaven and earth. So shall ye not only be Our good and faithful subjects, but render illustrious the best traditions of your forefathers.

The Way here set forth is indeed the teaching bequeathed by Our Imperial Ancestors, to be observed alike by Their Descendants and the subjects, infallible for all ages and true in all places. It is Our wish to lay it to heart in all reverence, in common with you, Our subjects, that we may all thus attain to the same virtue.

*The 30th day of the 10th month  
of the 23rd year of Meiji.*

(Imperial Sign Manual. Imperial Seal.)

### TRADUCTION FRANÇAISE.

---

A Nos sujets:

Nos Impériaux Ancêtres ont établi l'Empire sur une base large et impérissable et ils ont profondément et solidement implanté la Vertu dans Notre Patrie; Nos sujets, constamment unis dans les sentiments de loyauté et de piété filiale, en ont d'âge en âge illustré la beauté. Telle est la grandeur du caractère fondamental de Notre Empire, telle est aussi la source de Notre éducation. Vous, Nos sujets, soyez fils pieux, frères affectionnés, époux unis, amis sincères; vivez modestement et avec modération; étendez votre bienveillance à tous. adonnez-vous à la science et pratiquez les arts, et par là, développez vos facultés intellectuelles et cultivez vos qualités morales; de plus, travaillez pour le Bien Public et les intérêts de la Communauté; respectez toujours la Constitution et observez

les lois; si un jour les circonstances le demandent, offrez-vous courageusement à l'Etat; vous défendrez ainsi et maintiendrez la prospérité de Notre Trône Impérial, contemporain du Ciel et de la Terre. De la sorte, non seulement vous vous montrerez Nos bons et fidèles sujets, mais encore vous ferez briller les plus hautes traditions de vos aieux.

La Voie exposée ici est, en effet, la Doctrine que Nous ont léguée Nos Impériaux Ancêtres, pour être observée aussi bien par Leurs Descendants que par les sujets, infaillible en tout temps et vraie en tout lieu. C'est Notre vœu de la prendre à cœur en toute révérence, de concert avec vous, Nos sujets, afin que nous puissions atteindre tous à la même Vertu.

*Du trentième jour du dixième mois de la  
vingt troisième année de Meiji.*

(Signature et Sceau de l'Empereur.)

## Deutsche Uebersetzung.

---

Wir geben euch hiermit zu wissen:

Unsere Kaiserlichen Vorfahren haben das Reich auf breiter und ständiger Basis errichtet und die Tugend tief und fest eingepflanzt. Unsere Untertanen sind in unverbrüchlicher Treue gegen den Herrscher und in kindlicher Liebe zu den Eltern seines Sinnes gewesen und haben von Geschlecht zu Geschlecht diese schöne Gesinnung in ihrem Tun bekundet. Dies ist die edle Blüte unseres Staatsgebildes und zugleich auch der Urquell, aus dem unsere Erziehung entspringt. Ihr Untertanen! Liebet und ehret denn eure Eltern, seid ergeben euren Geschwistern, seid einig als Gatte und Gattin, und treu als Freund dem Freunde! Holtet auf bescheidene Mäßigung für euch selbst, euer Wohlwollen erstreckt sich auf Alle! Pfleget des Wissens und übt die Künste, auf daß ihr eure Kenntnisse und Fertigkeiten entwickelt und eure sittlichen Kräfte vervollkommen! Bestrebet euch ferner das öffentliche Wohl und das Allgemeininteresse zu fördern! Achtet die Reichsverfassung und befolget die Gesetze des Landes! Sollte es je sich nötig erweisen, so opfert euch tapfer für das Vaterland auf! Erhaltet und mehret also das Gedächtnis unserer

wie Himmel und Erde ewig dauernden Dynastic! Dann werdet ihr nicht nur Unsere guten und getreuen Untertanen sein, sondern dadurch auch die von den Vorfahren überkommenen Eigenschaften glänzend dartun.

Dieser Weg ist wahrlich ein Vermächtnis, das uns unsere Kaiserlichen Vorfahren hinterlassen haben, und das die Kaiserlichen Nachkommen sowie die Untertanen allesamt bewahren sollen: untrüglich für alle Zeiten und gültig an allen Orten. Es ist daher Unser Wunsch, daß Uns sowohl wie euch, Unsern Untertanen, dies stets in aller Ehrfurcht am Herzen liege, und daß wir alle zu derselben Tugend gelangen mögen.

Gegeben am 30. Tage des 10. Mondes  
des 23. Jahres Meiji.

(Kaiserliche Namensunterschrift. Kaiserliches Siegel.)

## APPENDIX.

---

### A NOTE ON THE ENGLISH TRANSLATION.

At the early dawn of our new era, His Majesty the Emperor was pleased to proclaim the need of seeking knowledge in all quarters of the globe. In obedience to this proclamation the Government took necessary measures to improve social and political systems and institutions after the most enlightened models, and the work of education received the greatest share of attention. In the fifth year of Meiji (1872), a comprehensive law relating to the system of education was issued, which had chiefly in view the introduction and cultivation of modern sciences. The educational institutions of the European nations had been carefully investigated and the curricula of our elementary, middle, and normal schools were formed so as to benefit by the valuable additions of those studies which had helped these nations to build up their civilization. Our education has had no connection with religion since olden times, and the new system is also entirely free from any sacerdotal influence. Secular morality has always been taught in the schools and forms the distinctive feature of our system.

As a result of foreign intercourse a phenomenal progress of new theories, ideas, manners, and customs ensued. The radical advocates of the new regime were

for giving up every thing native and for blindly following all things foreign, while their opponents obstinately clung to the old systems and turned a deaf ear to all suggestion of improvements. As regards the moral system of the nation, some would have it based on the principles of pure ethics, while others insisted on having Confucianism, Buddhism, or Christianity for its standard. Conflicting doctrines and wild views filled the atmosphere, and the people at large were at a loss which to follow. In such circumstances the morality taught in the schools had no fixed basis. The Educational Department at one time attempted to base it on the wise sayings and deeds of the ancients, but soon found them inadequate. Thoughtful men regretted this state of things and tried in vain to find a remedy. It was in this state of uncertainty that the following historical event took place at the Court.

On the thirtieth of October, in the twenty-third year of Meiji (1890), His Majesty the Emperor summoned Count (now Prince) Aritomo Yamagata, the then Prime Minister and Mr. (now Count) Akimasa Yoshikawa, the then Minister of Education, and graciously delivered to them the Rescript on Education. The next day the Minister of Education caused a copy of it to be sent to every school in the empire with instructions to those who were engaged in the work of education, to bear constantly in mind the spirit of this Rescript in the discharge of their responsible duties. On ceremonial and other suitable occasions, they were instructed to read and expound it before the assembled pupils.

Thus the people at last received a guidance which became a light for them to follow amid the chaos of theories and opinions, and all the schools in the empire found in it a uniform basis of moral teaching.

Although several English versions of the Rescript exist, they have been found deficient for conveying the exact sense of the original, of which a complete literal version into any other language is indeed a matter of great difficulty. Towards the end of last year, the Educational Department seeing the possibility of improving the translation convoked a number of scholars to discuss the matter. The accompanying version is the result. The scholars thus assembled considered their work by no means perfect, as the difficulty of rendering into a foreign language all the shades of meaning found in the text is almost insurmountable; yet we feel confident that it is a great improvement on all previous versions. We now distribute copies for the benefit of those foreigners who may wish to know the principle of our moral education.

The Department of Education, Japan.

*40th year of Meiji (1907).*

◆◆◆

教育勅語釋義全書

發行所

東京市牛込区辨天町一七四番地

中文館書店

電話東京三八四二二七二五番  
振替東京三一三〇三二二七番

著作権有作

印刷所

東京市京橋區木挽町三丁目十一

新井修平堂

印刷者

東京市牛込区辨天町一七四番地

中村時之助

著作者

東京市牛込区辨天町一七四番地

亘理章三郎

◆◆◆  
昭和九年五月二十日印 刷  
昭和九年五月二十四日發行

◆◆◆

定價金四圓十八錢

## (德道理倫)

東京高等師範學校教授 亘理章三郎著	軍人勅諭の御下賜と 其史的研究	大日本帝國國旗
東京高等師範學校教授 亘理章三郎著	國民精神作興詔書衍義	自然
東京高等師範學校教授 亘理章三郎著	御卽位勅語衍義	史觀
東京高等師範學校教授 亘理章三郎著	踐祚後朝見御儀勅語衍義	國
東京高等師範學校教授 亘理章三郎著	運動競技と訓育	家
洋裝 菊判 200	洋裝 菊判 216	洋裝 菊判 418
四一七	四一八	四一九
本書はフォード教授が自然現象としての國家を論じたもので譯り	競技界及び教育界の諸名士百餘人との意見に基いて、運動競技と訓育の理想を標示せるものにして實費の提供なり。	勅語の御趣旨を奉拜して、該博なる引據に依り、有難き思召を得し得べく謹釋説述せるものに於ても必讀の書。

## (德道理偷)

海老原邦雄著 兒童の道德生活	岩崎源兵衛著 精神作興報	菰田萬一郎著 文部省督學官	宗像逸郎著 東京高等師範學校前教授	高橋幸安太文著 國學院大學教授	深作田興著 東京帝國大學教授	新原擴著 國學院大學教授	荻原擴著 東京高等師範學校教授
洋裝四判 328	洋裝四判 334	洋裝四判 268	洋裝四判 314	洋裝菊判 480	洋裝菊判 392	洋裝四判 736	洋裝菊判 454
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
其の悉くを最も刻命に兒童の學生活を闡明す。前人の企及せざりし詳細なる兒童の道德	尊徳翁を現代に引戻して英國功利主義を取り入れ比較研究す。前例なき報德研究として思想善導の絶好著述である。	從來の如き乾燥無味なる實踐道徳の型を破り我等が此の複雜せたる世相に對し眞に順應せる活きた道徳を興味多く説述す。	實踐躬行の純道を呼唱し迷惑の現代思想界を覺醒せしめんとする著者の熱意現はれ。本書となる。	善生活を綜ゆる點から力説して實踐躬行の純道を呼唱し迷惑の現代思想界を覺醒せしめんとする著者の熱意現はれ。本書となる。	最も豊富なる學識を傾けて世界各國の倫理思想を討究し、最後に我邦現代の思想問題に付て數多の啓發を企つ。	志士的氣魄を傾倒して明治中興の源に溯り勅語御煥發の御趣旨及左右の情狀に付て最も詳細に講述す。	其最も該博なる學識と屈強なる國家生活、兩性關係、經濟生活、に區分づけ一々其の本質を西洋の哲學思想と對比して最も明快に説述せるものなり。

(德道理偷)

## (德道理倫)

		岡田忠一著 法學士	田中貢監修 法學士	田淵巖著 文學博士	戸城太郎著 明治大學教授	池岡直孝著 前鹿兒島市長	上野篤著 篤著	健兒之社
		入門社會學講話	公民教育提要	藝術的教訓と兒童文學の研究 教材修身	倫理的價值と其の對象	國家の倫理的基礎	國家の倫理的基礎	健兒之社
		洋裝菊判 410	洋裝異判 278	洋裝異判 264	洋裝異判 256	洋裝異判 274	洋裝異判 296	洋裝異判 296
		三言	二合	三呂	二呂	二呂	二呂	二呂
		機方に社會機能等學問を最に發達するが、最も付生入門具體的詳由とし、過く。其目的易	簡てに市町村に活動する公書かれたるもの、或は將來公の参考書である。に平易である。	坡本書的風潮に於て既文學理論と實學の提唱者たる者、及地方行政	著者は夙に於て新主義と實學の修養、哲學の成績が多くの血	若くして遡れる天才の研磨が、政治學、法律學、倫理學に多く血	日本社會の研究を政治學、法律學、倫理學に離れて、立論せらるるもの。日本社會の研究を政治學、法律學、倫理學に離れて、立論せらるるもの。	日本社會の研究を政治學、法律學、倫理學に離れて、立論せらるるもの。日本社會の研究を政治學、法律學、倫理學に離れて、立論せらるるもの。

終